

人生における経験の捉え方：
自伝的記憶・将来の想像・ライフスクリプトの関係の検討

川崎 采香

本論文は、自伝的記憶、自身の将来の想像、ライフスクリプトに焦点を当てた6章から構成されている。第1章の序論では先行研究を概観した上で本研究の目的と本論文の構成を示した。日本人大学生と中高年の男女を対象とし、第2章の研究1では自伝的記憶を、第3章の研究2では自身の将来の想像を、第4章の研究3ではライフスクリプトを、第5章の研究4ではこれら三者の関係性を、それぞれ検討した。第6章の総合考察ではこれらの研究を総括した。

序論では、各概念を説明し、先行研究から得られた知見を、想起された出来事の記述量の分布の特徴（10代後半から30歳頃のポジティブ感情を伴う出来事に記述量の山ができること）、年代差（十分に発達したと考えられる成人期以降にも変化がみられること）、性差（含まれる出来事内容や出来事に伴う年齢の一部に男女差がみられること）、海外と日本の特徴（含まれる出来事内容や特徴の一部が海外と日本で異なること）に分けて紹介した。また、日本人の成人期初期から中高年期を対象とした研究が十分に行われていないことを指摘し、この時期に焦点を当てた研究の必要性を述べた。さらに、自伝的記憶、自身の将来の想像、ライフスクリプトが相互に関係していることを踏まえ、三者を同じ対象者群で調べることの意義を述べた。

研究1では、日本人大学生と中高年の男女が想起する自伝的記憶を調べた。想起量の分布の山（学校の節目となる時期、レミニセンス・バンプ現象）は、ポジティブ感情とポジティブとネガティブの両方の感情を伴う出来事で確認された。また、日本人の特徴として、“教育、学校”に関連する出来事が自身の重要な思い出として想起されやすく、さらに、この“教育、学校”に関連する出来事は成人期以降に徐々に想起頻度が減少する可能性が示唆された。高齢期の特徴の1つと考えられてきたポジティブティ効果に関して、高齢期よりも少し前の時期を対象とすることで、この効果が加齢と共にポジティブとネガティブの両方の感情を伴う出来事の想起からポジティブ感情を伴う出来事の想起へ緩やかに変化することで起きる効果である可能性を示すことができた。男女間で出来事内容の一部に違いがみられ、これが加齢と共に顕著になっていくことが明らかとなった。

研究2では、日本人大学生と中高年の男女が想像する自身の将来を調べた。記述量の分布の山（大学生では30歳までの時期、中高年では節目となる年数を中心とした実年齢から近い時期）は、ポジティブ感情と両方の感情を伴う出来事で確認された。また、“死”に関する出来事が大学生と中高年の男女に共通して想像され、他者との繋がりを重視する日本の特徴を反映している可能性が示唆された。さらに、成人期以降の内容面の変化は緩やかに起こり、高齢期の特徴と考えられたポジティブティ効果は、中年を中心とした中高年期では実年齢から近い将来の出来事で見られることが明らかとなった。想像される出来事の内容や感情が男女間で異なり、男性よりも女性の方が自身のみでなく他者も関係する出来事を多く含むことが示された。

研究3では、日本人大学生と中高年の男女が形成するライフスクリプトを調べた。記述量の分布の山（10代後半から30歳の時期）は、ポジティブ感情とポジティブとネガティブの両方の感情を伴う出来事で確認された。また、日本文化を反映した“成人（式）”、日本の教育制度を反映した“部活動”と“受験”が生成された出来事カテゴリーに含まれ、他国との違いが明らかとなった。ライフスクリプト

は変化の小さい知識であると考えられているが、成人期以降でも含まれる出来事の内容や経験時期の一部が年代間で異なる可能性が示唆された。さらに、発達過程、出来事の経験年齢と感情の関係、言及率や経験年齢などが男女で異なる可能性が示唆された。

研究4では、研究1から研究3のデータを再分析することで、三者の関係を検討した。まず、自伝的記憶の想起時や自身の将来の想像時にライフスクリプトが手掛かりとなることが確認されただけでなく、ライフスクリプトの形成時に自伝的記憶が手掛かりとなることが示された。さらに、自伝的記憶と自身の将来の想像の違いには、認知的努力の大きさだけでなく、ライフスクリプトが関係していることが明らかとなった。また、自身の将来の想像時に手掛かりとするライフスクリプトには自伝的記憶が影響している可能性が示唆された。そして、これらの手掛かりの程度が、成人期では加齢と共に変化する可能性も示された。

総合考察では、研究1から研究4を総括し、従来行われてこなかった日本人の成人期を対象とした検討ができたことに対する学術的意義を論じた。さらに、日本人が過去や将来の人生像にどのような内容や感情、時期を含めるかを明らかにすることで、精神的健康の点から社会的意義があることを述べた。また、文化内で共有されている人生像を示し、それぞれの年代差や性差を明らかにすることで、多文化理解や他者理解に貢献できる可能性を述べた。最後に、本研究の課題と今後の展望についてまとめた。